

# 海外留学僧派遣育英会の将来について

海外留学僧派遣育英会理事 東 隆 眞

海外留学僧派遣育英会第三回総会にあたり、特に育英生の皆様に親しくお目にかかれるのは、私のよろこびとするところでございます。

昭和五十九年一月十五日に、善光寺住職黒田大圓老師が、善光寺開創十五周年を記念して開設なされまして、本年度五周年を迎えることになったわけです。

ただ今、十七名の留学生在がいらっしゃるわけですが、黒田老師は、わが日本が世界で一番大

きな仏教国でありながら、仏教界は残念ながら国際化に対応する能力に欠けている。ここに、海外生活を通して広く世界に目をむける人材の育成にとめたい、というのが、これをおはじめになった理由のひとつでございました。いまひとつは、特に日本仏教の場合は宗派仏教という色彩が強いのですが、宗派はそれぞれ違いますが、その宗祖を通じて仏教の開祖である釈尊に還るといふことから、仏教を学ぶ方々の中

で、将来性のある人物に、仏教興隆、国家の進運、更には世界人類の平和に寄与していただきたい、そのためにいささかなりともお役に立ちたい、というのが、黒田老師のおはじめになりました育英会設立の趣旨であろうかと、私は受けとめております。

私は全く、無力無能であります、幸い大学、大学院時代の同窓というご縁があつて、声をかけていただきましたので、私は黒田老師の応援団のひとりというつもりで、理事の末席を汚させていただいているわけでございます。

こういうご縁をいただきまして、ここにこうして皆様方と同席させていただきますことを、大変光榮に思っております。

さて、ここで、この育英会のことどもについて、私が感じておりますことを三つばかり申し上げたいと思つてございます。

ひとつは、五周年を迎えた育英会が、最近、

内外から注目されるようになりました。新聞雑誌も取り上げてくれるようになりました。特に中外日報（日本最大の仏教日刊紙）は、全面的に、無条件に会の育成ということについて、側面からのご協力をいただいております。こういう会があるということを広く知らせてくれるわけです。多くの方が、この会の存在を知っていただいて、この会を活用なさる方が、一人でも二人でもふえていただくことができれば、大変ありがたいことだと感ずるのであります。

この育英会は、一カ寺で運営されていきます。この財源というのは、そういう言い方が妥当かどうかわかりませんが、黒田老師のいわゆるポケットマネー。それから有志の方々の寄付金。そして一番大きな財源が、善光寺檀信徒の方々のご協力であることと、私は感じております。

黒田老師は、一食に一口のごはんを節約して善光寺に寄せてほしい、それで育英会を運営し



たいと檀信徒の方々に呼びかけられたわけ  
です。塵も積もれば山となるのたとえどおり、そ  
れが大きな力になっていたのでございます。

どんなことでもそうですが、何かひとつのこ  
とをはじめるといふのはなかなか大変なことだ  
ございます。どんな良いことをはじめても、だ  
からといってそれが思うように運ぶものではあ  
りません。賛成する方もあれば誹謗ひぼう中傷する方  
もあります。しかしながら、善光寺の檀信徒の方  
々は、その点よくご協力をしてくださってい  
ると感心している次第でございます。

そんなことで、この五周年を迎えたわけでご  
ざいますが、ここで中外日報の記事をご紹介します  
たいと存じます。

私は、曹洞宗宗務庁から出ている曹洞宗の機  
関誌「曹洞宗報」に、足かけ五年ばかり「誓願  
に生きる人々」というテーマで、ずっと連載を  
してまいりました。現在校正中で、二百ページ

あまりの単行本になろうかと思いません。この本のあと書きに、この育英会の事を記しておいたのではありませんが、昭和六十二年十二月に、宗教とアジア社会セミナー、これは、上智大学のアジア文化研究所と、パリ第七大学の共催ということで、フランスのパリ第一大学で開かれました。日本の仏教界を代表しまして、黒田老師は、新しい教化路線を求めて「十五年の軌跡とその成果」というテーマで、ユニークな善光寺の教化と運営について報告されまして、強い関心を集めました。上智大学アジア文化研究所の石澤所長さんのお話によりますと、日本の仏教界から黒田老師を特に指名したが、これが今回のセミナーの目玉となったということを、中外日報の昭和六十二年十二月十二日付で書いておられます。

先ほど申しましたように、中外日報が、全面的に無条件のご協力をいただいて、ご発表下さ

ったわけですけど、この記事をご覧になりまして、上智大学の安斉伸教授が、自分は仏教徒ではないがと前置きして、黒田老師の寺院経営は、第二バチカン公会議以後、現代のカトリック教会が目指しながらなかなか実現できないているのに、これを、理念的にも実践的にも先取りをしたその業績を高く評価しなければならぬといっておられます。これは昭和六十二年十二月二十三日付の中外日報への安斉教授の寄稿です。教授は、寺院も教会も、黒田師の情熱ある宗教者の養成と、海外派遣の実践をも含めて、黒田師の理念と実践の前に自己の姿を映し出してほしいものと願うと結んでおられます。

安斉教授は、宗門外のお方でございます。宗門の外の眼の具わった方の高い評価を得たということに、私は感銘しました。そこで、やがて上梓する拙書のと書きに紹介させていただいたというわけでございます。

こういうことで、世界的な観点から注目され、評価されつつあるということを、私どもは、五周年を迎えたいま、こころして受けとめなければならぬと存じます。

二番目に申し上げたいのは、二人の仏教僧のことでございます。

ひとり、明治時代に、浄土真宗、東本願寺の方で小粟栖香頂という方がいらつしやいま



す。それから、十数年前に亡くなりましたが私の恩師でもあります小川弘貫という先生のことです。この二人の方のお考えをご紹介します。

はじめに小栗栖香頂という方ですが、この方は明治六年（十年頃）にかけて東本願寺の派遣僧という形で、東本願寺の上海別院の總督をつとめました。そうして、上海で著書をあらわしたり、幼稚園や小学校を作りました。特に、この小学校はのちの上海日本人学校のはじまりだということですが、また、「喇嘛教沿革」とか「北京護法論」といった著書をあらわしまして、大いに氣炎を吐いて、当時の仏教革新運動を目指したわけですが、こういうことを言っています。

明治時代というのは文明開化、廢仏棄釈、そういうことを頭に入れて考えなければならぬのですが、インドと中国と日本、この三国の仏教同盟を設立させました。仏教による全アジア

民族の提携ということを考えて、これを当時の中国の日本人僧・中国人僧に話しかけるのですが、なかなか賛同を得られなかつたようです。

更には、世界各国に仏教の教会を立てて、仏教を宣伝したいと努力されたのですが、賛同を得られないまま明治の中頃、病を得て亡くなったのであります。しかしながら、この方の遺志は、中国の大虚法師に受け継がれて、当時中国にも廢仏棄釈があつたのですが、これに敢然と抗しまして、中国仏学会を結成されました。そして「中国仏教」「海潮音」「現代僧伽」という雑誌を刊行しました。武昌という所に仏学院も作られました。

そして、仏教による三民主義（三仏主義）というものをとなえられまして、中国革命はそれによって完成する、更には仏教の世界的發展を期するということ、同時に墮眠をむさぼっている中国僧の腐敗と墮落を糾弾しまして、大いに

努力なされたのですが、これは小粟栖香頂さんの遺志と理想をついでいると見られているわけです。特に注目しますのは、インド・中国・日本の三国仏教同盟ということですよ（道端良秀著『日中仏教友好二千年史』）。

私の先生でありました小川弘貫という方ですが、曹洞宗の方で、唯識の学者でもありました。第二次大戦中は広東に出征されていたのですが、先生の自慢話のひとつは、一度として敵（中国人）に刀を抜いたり鉄砲を向けたりしたことはなかったそうです。

先生が授業でおっしゃったことは、これから、インドと中国と日本が団結して仏教精神を発揮すれば、世界の平和はやってくる、君たちはそのつもりで頑張ってほしいということでありました。

これは、さきの小粟栖香頂さんのお考えと似ているようにも思えますが、ちよつとちがうと

思います。仏教精神とは、私は、和合の原理だと思えます。相手を倒したり、相手と対立することではなく、相手を認める、対手を容れる、相手と仲良くする。闘争するのではなく、お互いに相手を容れるということです。幸い、インド・中国・日本の仏教は和合の精神でやってきたし、これが一番理想だということであろうと思えます。

特に、二十一世紀は、日本では、宗教の時代だとか心の時代だとか言われておりますが、宗教が対立抗争の原因となるようなことがあつてはならないと思えます。

心の時代とはいいますが、物に対する心、物質に対する精神というような解釈ではなく、物と心の調和でなくてはならないと思うのです。

いずれにしてもこれまでの仏教は、あまりにも口先だけで唱えてきたところが多かったのではないのでしょうか。二十一世紀に向けて我々は、

誓願を持つて、お互いに、世界平和のために行  
動し実践していかなくてはならないんじゃない  
か。

最後に申し上げたいことは、私の個人的な希  
望であります。育英会というご縁で、私たち  
はここにこうして集まっているわけでありま  
す。まず、育英生の方々は仲良くしていただき  
たい。おたがいに、連絡を充分に取り合い、良  
い刺激をつくりあつて、学問、信仰、いろい  
ろな面において協力し合い、月並みな言い方にな  
りますが、世のため人のために尽くしていただ  
きたい。育英会は、まだはじまったばかりです  
が、皆さまは、育英会の最初期の方々でありま  
すから、やがて、先輩というか、ご先祖とい  
うか、そういう位置に立たれるのであります。そ  
こで、後続する後輩たちのために新しい道を切  
り開いていただきたいと願っております。

